

# 江戸の「ゴミ処理再考」

“リサイクル都市”・“清潔都市”像を越えて

岩淵令治

A Re-examination of Garbage Disposal in Edo: Beyond the Image of a “Recycling City” and “Clean City”

## はじめに

- ①町人地における日常的ゴミの処理
- ②大名屋敷のゴミ処理
- ③近代のゴミ処理の展開  
おわりに

## 〔論文要旨〕

一九八〇年代後半以降、「地球環境」への関心が高まる中で、日本近世都市、とりわけ江戸を「リサイクル都市」・「清潔都市」と評価する言説が浸透しつつある。このイメージは、とくに一九八〇年代の都市江戸の社会・文化の再評価の中で作られ、さらに環境ブームの中で増幅された。これらの論拠となっているのは、江戸におけるさまざまな「リサイクル業」の存在や下肥の流通、同時期の西欧都市に比較して清潔さを保っていたゴミの処理システムの存在である。しかし、筆者はこれは過大評価だと考へている。本論では、ゴミの処理システムを再検討し、近年のイメージを批判した。

ゴミの処理システムについては、すでに伊藤好一氏の詳細かつ実証的な研究がある。請負人が収集・運搬・埋立処理を行うこのシステムは、実際には大正七（一九一八）年の東京市全域での市直営方式導入まで続けられたが、近代に入ると「公衆衛生」を前に衛生面が問題とされたのである。また、このシステムは中心部の町人地で適用され

れたものであり、場末の町や武家地などは対象とはしていなかった。検討の結果、場末の町では、請負人と契約せず、屋敷内に埋めるという処理を行う町があつたことが確認できた。また、武家地については、藩邸では邸内の縁辺部にゴミ捨場が設けられ、出入の下掃除の百姓がゴミを持ち出していたが、不法投棄も跡を絶たなかつたことが判明した。さらに、近世段階より江戸のゴミは千葉県の一部の地域で肥料として利用され、近代に入ってもその関係は続き、焼却処理の進展を妨げるものとなつた。

江戸のゴミ処理に関する著述は、ほとんどが伊藤氏の研究に拠り、とくにシステムのみをとりあげて「清潔都市江戸」像を増幅してしまつた。こうした近世都市上清潔都市を語る言説はまことにあやういといわざるをえない。今後は、システム外の地域も含めて実態を解明し、総合的に江戸のゴミ処理を見ていく必要があるだろう。